＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

GCOE NewsLetter
[No.10 2008/7/24]

2008年度第１回gCOE論文賞の応募について
「テクスト布置解釈学原論」（前期）の成績評価方法について
gCOE大学院生説明会開催報告
「テクスト布置解釈学原論」の要約
「テクスト布置解釈学各論」の要約
第10回オープンレクチャーの要約
gCOE研究教育員ブリーフィング要約
gCOEスタッフ海外出張報告
台湾・清華大学からの訪問団によるgCOE拠点視察について
gCOE NewsLetter No.2発行について

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

■ 2008年度第１回gCOE論文賞の応募について

グローバルCOEでは学術論文を募って選考を行い、優秀な論文に対して「グローバル COE論文賞」として顕彰し、2009年3月刊行予定の 『HERSETEC』に掲載します。多くの方々の積極的なご応募を期待します。
応募の受付期間は8月27日〜9月8日です。応募方法について詳しくは下記URLからグローバルCOEのWebサイトにアクセスしてご覧ください。
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education04/

■ 「テクスト布置解釈学原論」（前期）の成績評価方法について

グローバルCOE授業科目の「テクスト布置解釈学原論」（前期）の成績評価方法については下記の通りです。
・レポート課題：「授業で扱われた内容を自分の課程博士論文計画と関連させて論じなさい」
・提出期限：8月11日（月）
・提出先：グローバルCOE事務室(131室)

■ gCOE大学院生説明会開催報告

グローバルCOEでは去る7月9日(水)に大学院説明会を開催し、今後の教育事業（研究アシスタント募集、グローバルCOE論文賞、後期授業）について説明を行ないました。これらの情報はgCOEのWebページにも掲載していますので、アクセスしてご覧ください。

■ 「テクスト布置解釈学原論」の要約

宮地朝子（6/10,17）
「“テクスト布置”からみる日本語文末形式の諸用法」

「表現」する—語り、書くとき、私達が用いる日本語は非常に多様である。書物・文献内の文字によって記録された用例は言語研究のデータとしても重要であり、ジャンルや文体、地の文・会話文といった位相を区別しながら活用されてきた。ただし歴史的な文献における「文体」や「ジャンル」は、あくまで「文法」の外側の「位相」として把握されていた。一方で、テクストとしての「日本語」の多様性は、そのような位相差—より一般化した形での「文字／地の文なら「書き言葉」、セリフなら「話し言葉」」といった分類では捉えられず、場合によっては程度差でしか捉えられないような連続的かつ横断的・相互交渉的な様相を持つ。文体・ジャンルによって各々の言語形式が「固い」「古い」あるいは「新しい」「談話的」などといった諸用法を持つことも指摘されている。興味深いことにこの言語形式の連続的な多様性や文体—時と場合—による意味用法の違いを、母語話者は無意識に使い分けている。言文一致を経て文体間の横断・相互交渉がしやすくなった近代以降の日本語においてはますますその性質が顕著になっている。とすれば、言語形式の意味用法は、個別の形式の持つ本質的意味とテクストのタイプや文体／ジャンル的差違に重なる伝達場面の構造的差違の組み合わせによって発現するものと考えることが出来るのではないか。（6/10）

そこで本講義では日本語の文体的多様性を“テクスト布置”のバリエーションとして見ながら人間の言語運用における操作性と組み合わせて整理し文法的説明に組み入れることを提案した。文体的差違、すなわちテクストの多様性を生み出すのは話手の身体性の強弱と、話手・聞手の共在性・非共在性と

して整理できる伝達場面のタイプであると仮説する。〈共在〉とは対面対話のように個別具体・特定的な話手と聞手との伝達場面であり、相対する極としての〈非共在〉とは文字媒体のマスメディアや論文のように、話手の個別的身体性が可能な限り捨象され特定の聞手もいない（または抽象・多数）という特徴を持つ。この場面の差を前提とした話手の操作が、言語形式の多様な用法の発現に関わっている。例えば文末詞「です・ます」は、聞手との距離を示す「丁寧語」の用法は、具体的な話手・聞手のいるテクストにおいてのみ発現する。論理的な文章や文字媒体のマスメディアといったテクストにおいては「やさしい」「わかりやすい」といった、敬語としての距離の表示とは相反する用法が発現する。これは〈共在〉で距離の表示が「遠」となる一方、〈非共在〉においては「です・ます」の使用が聞手を顕在化・特定化することにより関係を作り出す効果が生じるためと説明できる。このような説明は、語用論的条件を組み込んだ文法的説明の一つであり、また言語変化を根拠づける観点をも提供する。（6/17）

鎌田隆行（6/16, 23）
「生成論と前＝テクスト」

本講義では二回にわたって生成論の成立とその理論的・批評的射程、また解釈学との関係について概説を行った。
フランスで1970年代に理論化された生成論は、文学作品の生成資料を扱う点では一見したところ従来の文献学的な文学研究と対象を同じくするように見えるかもしれないが、作者の意図を十全に実現した「単一の」テクストの確定を目的とする後者とは異なり、絶えざる生成変化を続ける「プロセスとしての文学」(A. グレジヨン)を志向し、複数的で可変的な作品概念に基礎付けられている。
例えば近代以降の文学作品に関して我々が今日読解を行う版本は、一般的に作者生前の最終版に準拠した校訂版であるが、このような「最終版」に先立つ一連の制作・出版過程で生じた書記物（メモ書き、プラン、シナリオ、草稿、校正刷り、初版、再版本等）を「前＝テクスト」として捉え、作品の諸要素と全体構造の誕生とその変容を分析することで作者の文学的想像力の展開を検証し、また作品の意味作用の新たな可能性を探ることが生成論の主たる目的である。
他方、生成論は作品の制作をその問いの中心に据えつつも、解釈や受容とい

う問題と無縁でないどころか、本質的なつながりを持っていることにも留意する必要がある（GCOE第2回国際研究集会プロシーディング参照）。まず、作品の生成のダイナミズムを跡付ける前＝テクストとは決して所与のものではなく、分析者が時にカオス的ですらある資料群から構築していくものであり、一つの解釈、というかむしろ複数の解釈行為の所産である。さらに、作者にとっても草稿や校正刷りで推敲を繰り返し、作品の美学性や思想的文体的完成度を高めていくことは、生成しつつある作品の新たな意味作用の可能性を自ら現動化していくことに他ならず、（再）解釈行為のダイナミズムがかかる創造の運動を惹起し続けているのである。

■「テクスト布置解釈学各論」の要約

各論II
鎌田隆行（4/23, 30, 5/7, 21）

テクスト布置という観点から考察すべき「テクスト」とは、手稿から印刷本に至るまで様々な媒体の物質性を纏い、社会的・文化的コンテクストの作用を受けながら生成し、流通し、受容されていく本質体である。かつてロラン・バルトの流れを汲む「テクスト論」が提唱したようにテクストから作者や歴史性を追放してしまうのではなく、相互に緊密に結びついている「作者」概念、テクストの物質性、文学的表象の様態、受容主体等からなる布置構造を歴史的視座のもとに理解していくことこそが、人間の文学的営為を総体的に捉えなおし、さらには伝統的な作者像の揺らぎ、読者の役割の拡大、著作権問題といった書記文化の今日的な問題の考察の深化をも可能ならしめる。こうした観点から、本講義ではパラテクスト（序文的言説、題名、作者名、支持体など）の多様な現れとその機能の問題に特化し、G.ジュネットの『スイユ』を参照しつつ、フランスおよび日本の近代文学の事例を取り上げて論じた。
文学テクストが読まれるにあたっては、それがいかなる媒体に載せられ、いかなるフォーマットで、いかなる構成を取っているかが読者の読解に影響を与える。ペーパーバックや文庫本の「聖別」機能（廉価本として多くの読者を対象として再版されるに値する評価を得た著作、という位置づけを与える）などはその好例である。
他方、作者による序文的言説の機能についても概観した。序文、後書き、献

辞文などの広義の序文的テクストは、主として1)作品の価値の主張、2)読解の方向付け、という二つの機能を担う。例えばフランスの19世紀前半のように小説が未だ本格的な文学の一ジャンルとして認知されていない時代には、受容への不安を反映し、作品の価値を正当化する様々な序文戦略（特にテクストの真実性を強調する言説）への依拠という特徴が見られるのである。

■ 第10回オープンレクチャーの要約

2008年7月16日(水）18時〜19時　国際センター15F gCOEオフィス
宮地朝子准教授（文学研究科・日本語学）
題目：「日本語形式名詞の文法変化—「ほか」を一例に—」

日本語の名詞ホカは㈰「そと」意（葦垣のほか）に始まり現代までに以下の用法を獲得している。㈪概念的範囲外（ほかから来た／思いのほか）㈫範囲外の要素（ほかの散ったあと咲いた桜）㈬累加（山田のほかに鈴木が来た）㈭除外（山田のほか学生は来なかった）㈮シカ的限定（100円ほかない：＝シカ、近畿方言等）。

㈪-㈭はホカの抽象化による用法獲得と説明できる。㈰における名詞ソトとの交替を受け、名詞一般に生じる比喩的な意味拡張による㈪㈫の確立、［指示詞+ホカ]句での使用によって進行した抽象化により、ホカは中世末までに修飾部xを必須とし「[xのホカ]のX」の形で範疇的意味〈範囲〉において事物Xの値（断片）を指示する形式的な値名詞となった。値名詞は名詞として格や述語に立ち[名詞の名詞］構造の前項・後項に立つ一方、遊離数量詞と並行に項名詞の連体修飾と述語の連用修飾を同時に果たし（破産のほかの方法は〜＝方法は破産のほか〜）主名詞XなしでXの断片を指示する（[三人]が〜／[破産のほか]は〜）。㈫㈬㈭は値名詞としての特質の発現である。㈮は名詞を脱する用法だが、㈭のホカ句が否定の作用域「外」の再分析を受けて確立したと考えられる。当該の統語的位置は助詞シカ・ハ・モ句に同じである。

名詞一般に生じる現象、値名詞の特性、否定文による再分析による説明はダケ・ホド・カギリなど助詞とされる名詞由来語にも援用可能であると考える。

■ gCOE研究教育員ブリーフィング要約

第6回ブリーフィング(2008/7/2)
杉山奈生子「ピュグマリオン効果〜生きているかのような彫像の歩み、18世紀フランスを中心に〜」

発表者は21世紀COEプログラムおよびグローバルCOEプログラムにおいて一貫して、18世紀フランスの画家アントワーヌ・ヴァトーの雅宴画に関する考察を行ってきた（Cf.　SITES, 3-1,4-1;　HERSETEC,1-1)。雅な紳士淑女が庭園に憩い恋愛に興ずる模様を描いたヴァトーの雅宴画には、生きているかのような裸婦の彫像が度々登場する。この生々しい彫刻表現の視覚的着想源として、描かれた彫像を生身の人間に変容させる「ピュグマリオン効果」を鑑賞用に意図した古代彫刻版画集（Galleria Giustiniana, 1640, etc.）を、形態的な類似性（Jan de Bischop, Signorum veterum icones, no. 76, 1669）も含めて提示してきた。この名称の由来となったピュグマリオン神話は、ヴァトーの生きた18世紀に爆発的な人気を博し、これを主題とした作品が諸芸術分野で制作された。この現象を、ヴァトーの彫刻モティーフを解釈するひとつの重要なコンテクストとして位置づけ考察する。

■ gCOEスタッフ海外出張報告

佐藤彰一（gCOE拠点リーダー・西洋史学）

6月18日から27日にかけてヨーロッパに出張し、フランス、イギリス、ベルギーを訪問した。ミッションは三重である。第一がプロヴァンス大学との大学院レベルの研究と教育に関する協定の打診。第二が西洋中世歴史テクストの解釈学研究に関するフランス、イギリス、ベルギーの研究者との意見交換。三番目のミッションが、2009年3月に開催予定の国際研究集会「西洋中世テクストの解釈学と参照体系」（仮題）の海外招聘報告者の人選と打合わせである。

　去る5月にプロヴァンス大学の国際交流担当副学長ジャン＝クロード・アブリック教授を責任者とする交流担当スタッフが来日し、幾つかの大学を表敬訪問されたが、私どもグローバルCOE執行部とも歓談する機会があった。これを承けて、6月19日に現地で落ち合った重見准教授とともに、午後2時過ぎからプロヴァンス大学の会議室で文学系大学院（Ecole doctorale "Langues,

Lettres et Arts"）の責任者であるファンロー教授をはじめとする、同大学院の3名ほどの教員を交えての会議に臨んだ。この会議の内容については、技術統括責任者である重見准教授の稿に譲りたい。

第二のミッションである西洋中世歴史テクストの解釈学的研究についての意見交換は、パリ第４大学のミシェル・ソー、ドミニク・バルテルミィ、ジャン・ガスクの諸教授、ソルボンヌ高等研究院ジャン＝ルー・ルメートル教授、コレージュ・ド・フランス名誉教授ピエール・トゥベール氏などと個別にアポイントメントを取って行なわれた。いずれの諸氏も名古屋大学をすでに訪れ講演や授業を行なうか、COEの国際研究集会に参加した経験があり、私どもの研究環境や、COEの目指すところを知悉している方々である。私が研究の進展状況と大学院教育の新機軸として立ち上げた授業について行なった説明に対して、フランスでの大学院教育の改革を踏まえて、有益なコメントと助言を得ることができた。バルテルミー教授は2009年7月に一ヶ月滞在して、大学院向けの授業（英語）を担当することを快諾してくれた。教授は来年の授業で日本中世の武士社会についての講義をソルボンヌで比較史的見地から講ずる予定とのことで、日欧の戦士文化の中での文字記録の機能に、新たな光が当てられるものと期待される。

第三の課題は上記国際研究集会の主旨を説明した上で、そこでの報告を承諾して貰うことであった。私が選んだのはオクスフォード大学オールソールズ学寮チチェーレ歴史講座担当教授クリス・ウィッカム氏、パリ第4大学教授ジャン・ガスク氏、ナミュール大学講師エチエンヌ・ルナール氏、パリ高等師範学校教授フランソワ・ムナン氏、パリ第一大学講師スミ・シマハラ氏である。幸いすべての候補者が報告を快諾し、招聘に応じてくれた。ウイッカム教授は現在世界のヨーロッパ中世史学のトップに位置し、最も精力的かつ大胆に歴史像書き換える作業を行っていることを知らない研究者はいない。ガスク教授はパピルス学、ビザンツ史の泰斗であり、最近イエルサレム司教ソフォロニウスが著した『聖キルスおよび聖ヨハネス奇蹟譚』の校訂本を出版し、聖人伝テクストの解釈学に新生面を開いた。ルナール氏はカロリング期の大所領関連記録の専門家で、伝統あるベルギーの中世史研究の次代をになう一人である。ムナン氏はイタリア中世史研究の大御所トゥベール教授の門下生で、中世ロンバルディア地方に関する大著で有名であり、多様な類型の文字記録で抜きん出ているイタリアのエキスパート。スミ・シマハラ氏は、フランスの若手の女性中世史家では最も嘱望される一人で、古くはマルク・ブロック、近くは先述のドミニク・バルテルミー教授も選ばれたことの

ある、超難関のティエール財団給費生に採用された才媛である。彼女は『オーセールのエイモンの著作における注解と政治』と題する見事な学位論文を2006年に提出し、最高の評価で合格した。聖書注解という解釈学の中の解釈学とも称すべき、わが国の研究者の層が決して厚くない分野に、新たな知的刺戟がもたらされることが期待される。

出張の全期間にわたって、大陸もイングランドも素晴らしい晴天で、温度計が30度に達しない日はなかった。この猛暑のなかで午前にオクスフォードで、夕刻にベルギーでまた打合わせという強行スケジュールであったが、こうした日程もユーロスターがあったればこそである。その利便性に感謝すると同時に、料金の高さにはほとほと呆れた。ホテルも同様である。ユーロ高、ポンド高が背景にあり、実物比較で言うと50パーセントから70パーセントが為替レートによる水増しである。40年前、1ドル360円時代に2年間フランスで生活した経験を、フト思い出した出張であった。

重見晋也（gCOE技術統括責任者・電子テクスト学）

2008年6月17日から21日までの期間，グローバルCOEプログラム『テクスト布置の解釈学的研究と教育』とフランス・プロヴァンス大学との間に学術交流・学生交流の協定を締結するべく，フランス・プロヴァンス大学を訪問した．6月19日（木）14時30分よりプロヴァンス大学Salle des Conseils Aux Schumanにおいて行われた会議には，グローバルCOEから，拠点リーダーの佐藤教授と重見の2名が出席し，プロヴァンス大学からは国際交流担当理事であるABRIC教授と国際交流事務局責任者のKHELLFA女史，さらに言語・文学・芸術学大学院コース長のFANLO教授，l'U.F.R. LACS（文学・芸術・コミュニケーション・言語科学コース）長のSTOFFEL教授に加え，日本関係を専門とする教員としてDELTEIL准教授（日本文学），CONDOMINAS准教授（社会学）の6名が出席した．
会議はプロヴァンス大学とgCOEプログラムとの間に学術協定を締結することの重要性を強調するABRIC理事の挨拶に始まり，続いて佐藤教授から2007年に始まったgCOEプログラムの活動状況について，国際研究集会を中心としてイギリス，アメリカ，カナダ，シンガポールなどの大学と学術交流を行っていること，現在gCOEプログラムでは博士後期課程の大学院生が3年の標準年限内で課程博士論文を提出することができるよう，論文賞の創設や海外派遣事業を推進していることなどの説明があった．

その上で，gCOEプログラムより次の3点をプロヴァンス大学に提案した：1)プロヴァンス大学とgCOEプログラムの共催による研究集会やシンポジウムを実施する，2)プロヴァンス大学からgCOEへの研究者の招聘，3)両大学に在籍する大学院博士後期課程学生の交流．以上の提案に対して，プロヴァンス大学の参加者から肯定的な反応があり，gCOEからの提案を関係する教員に連絡し，できるだけ早く両大学間の学術協定が実効力を持つようプロヴァンス大学側の体制を整備することが確認された．
われわれが訪問した時期は，ちょうどプロヴァンス大学の総長選挙の時期にあたっており，今後フランス側の受け入れ体制についても再編される可能性を含んでいる．また，夏の長期休暇前の時期であったということもあり，フランス側での教員・学生への周知期間が必ずしも十分とられたともいえない．長期休暇が終了し次第話し合いを再開する必要があるだろう．gCOEとしても本年度中より，プロヴァンス大学と名古屋大学の間での学生交流を開始することを望んでいる．

金銀珠（gCOE研究教育員・日本語学）

2008年7月9日（水）から7月14日（月）まで，5泊6日間，韓国の釜山に出張した。釜山滞在中には，釜山外国語大学で7月10日から7月12日まで開催された「韓国日本学連合会　第6回国際学術大会」に参加し，学術発表した。また，同大学で7月11日から7月13日まで開催された「日本語教育学世界大会2008」の研究発表を聞き，若手研究者と意見交換を行った。
交通便は中部国際空港と韓国釜山の金海国際空港の往復で，大韓航空を利用した。また，現地での宿泊は釜山外国語大学に近いホテルを利用した。
「韓国日本学連合会　国際学術大会」は日本語，日本文学，日本文化に関係する韓国の各学会が合同で年に１度開催する韓国最大の日本関連学会である。学術発表は，各分野に分かれて行われ，20分の発表時間と10分の質疑応答で構成されている。報告者の発表は「中古語の連体修飾構造における意味役割分担」というタイトルで7月12日（土）の16時35分から17時5分まで行われた。発表内容を簡単に紹介すると，たとえば，現代日本語で「髪の長い女」という表現は平安時代の日本語では「女の髪長き」「髪の長き女」「髪長き女」のような三つの構造で表現されることが可能であるが，平安時代のこのような連体修飾表現のそれぞれの意味的統語的特徴を明らかにする趣旨の発表であった。言語の経済性からみれば，人間が同じ意味のことを三つの

構造でランダムに選択したとは考えにくく，何らかの意味的統語的差があると考えた方が合理的であろうと考えられるためである。今回の発表は，報告者の見取り図の中では，現代日本語における「髪の長い女」のような属格主語が，なぜ，1000年以上の間生き続けてきているのか，また，今後どのように変化していくのかを解明する作業の一部に位置づけられている。
学会中には，7月11日に行われたレセプションにも参加した。これは，同大学で時期を一緒にして行われた「日本語教育学世界大会2008」との合同レセプションで，ハーバードやプリンストン大学等の著名な言語学者を目の前にして，非常に感銘を受けた。「日本学連合会」は7月12日に終了し，7月13日は「日本語教育学世界大会」での招待講演と研究発表を聞き，若手研究者と意見交換した。
本発表の結果については，今後のGCOEの研究事業の中で論文化していく予定である。

■台湾・清華大学からの訪問団によるgCOE拠点視察について

国立清華大学（台湾）の陳文村学長および人文社会学部長張維安教授を含めた6名によるグローバルCOEプログラム『テクスト布置の解釈学的研究と教育』拠点への訪問があり，2008年7月10日15時より文系総合館2階第1会議室にて懇談会をもちました.
清華大学は卒業生に3名のノーベル賞受賞者（物理学賞2名，化学賞1名）を輩出した台湾屈指の国立大学であり，名古屋大学とは全学協定を既に締結していますが，今回の視察は名古屋大学への表敬訪問の機会に，人文系の拠点との交流を持ちたいという清華大学の強い希望により実現したものです.
グローバルCOEプログラムからは，佐藤彰一教授（拠点リーダー），釘貫亨教授（教育担当サブリーダー），重見晋也准教授（技術統括責任者）と野田ゆかり（運営コーディネーター）の4名に加えて，文学研究科より和田壽弘文学研究科長と柳総務課長（文学研究科担当）が対応しました.
懇談会は陳学長と和田研究科長の挨拶に始まり，佐藤教授と張教授との間で日本と台湾における人文学分野の研究・教育体制について意見交換をしました．懇談の中で清華大学からは，理工系中心の大学ではあるがアジア地域の人文社会学的研究を推進するための研究所を設立し人文学分野の研究教育にも力を入れているとの現状が説明されました．グローバルCOEプログラムか

らは，本拠点が人文科学分野で選ばれた12拠点のうちの1つであること，本プログラムが博士後期課程に在籍する大学院生の教育に重点を置いたプログラムであること，地域に限定した研究ではなくテクストに対して学際的な視点から研究拠点形成を推進していること，論文賞の創設や海外派遣事業などにより課程博士論文の執筆支援を強力に推進していることなどを説明しました.
懇談の最後には研究教育交流の可能性を確認し，参加者一同が両大学の今後の発展を祈念して握手を交わしました.

■ gCOE NewsLetter No.2発行について

---

gCOE NewsLetter (紙媒体)第2号が発行されました。gCOE事務室(131室)にて配布していますので、ぜひご覧ください。

次回のメール版NewsLetterの発行は2008年8月中旬を予定しています。

・・・…━━━…・

GCOE「テクスト布置の解釈学的研究と教育」

Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/

NewsLetter No.10
発行：GCOE編集部
編集担当：鎌田隆行

Copyright(C) 2008 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

・・・…━━━…・

---

gcoe_infos mailing list
gcoe_infos@gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp
http://svr.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/mailman/listinfo/gcoe_infos